

## 第5回 非臨床血液コンファレンス

シスメックス株式会社学術部 岸本 哲也

去る9月10日(金)、東京・品川プリンスホテルにおいて第5回非臨床血液コンファレンスが開催されました。本コンファレンスはシスメックス株式会社が主催するセミナーで、主として製薬メーカーの安全性研究所、医薬品開発受託研究機関などにおいて、安全性試験(特に血液毒性)を担当されている方々を対象に、実験動物の血液学、血液学的検査に関する最近の話題などを提供するとともに、スライドコンファレンスによる検査技術の向上、さらに情報交換の場として開催されています。

過去のコンファレンスでは、トキシコロジー領域における血液検査の意義にはじまり、マウス、ラットなどのげっ歯類、サル、ミニブタなど非げっ歯類の血液学的特性、血液細胞のKineticsなどの話題を取り上げてきました。

第5回目の開催となる今回は、『トキシコロジー領域における凝固線溶系の検査』のテーマで「血小板・凝固検査」を中心にした話題の提供が行われました。



### 血小板と骨髄巨核球

信州大学ヒト環境科学研究支援センター  
松本清司 先生

松本先生は、第1回より毎回、本セミナーの座長の労をお取りいただきしており、毎回、コンファレンステーマ、講演内容など、企画に斬新なアイデアをご提供いただいております。今回は、血小板の基本的な機能から毒性試験における骨髄巨核球の造血動態、末梢血・骨髄の細胞観察のポイント、さらに実験動物における異常症例まで、広範囲の話題を分かりやすくご提供いただきました。



## 薬と凝固・線溶の話

元 杏林大学保健学部教授  
中竹俊彦 先生

凝固・線溶検査の基礎を中心に測定原理上の問題点や注意点をはじめ、測定試薬が「生物製剤」である凝固検査の標準化の難しさなど、血液凝固・線溶検査の様々な分野に渡る概論を分かりやすく解説いただきました。

さらに薬剤と凝固検査の関係や、動物検体での凝固・線溶検査の難しさなどのトキシコロジー領域で注意すべき検査のポイントについての話題もご提供いただきました。

## 実験動物における血液凝固・線溶系検査の標準化の試み

株式会社中外医学研究所 薬理・病態研究センター  
高橋佳澄 先生、豊田直人 先生

日本臨床化学会動物臨床化学専門委員会が中心となり、各製薬メーカー、受託研究機関などの研究者の方々が参画して実施している実験動物における凝固検査標準化の取り組みについて報告がありました。

採血条件、遠心条件、凍結・融解条件および保存安定性など、ヒト臨床検体ではある程度確立されている事項においても、動物検体では標準化がなされていないことに加え、動物種差や系統差、摂餌による影響など動物固有の問題が加わり、問題を複雑化

させています。

これらの問題を解消し、検査を標準化する方法を確立するための第1ステップとして『実験動物における血液凝固系検査試料の採取条件』プロジェクトが立案されています。

凝固検査では、使用する試薬・装置の組み合わせが測定結果に大きな影響を及ぼすことから、これらの影響を排除するために、本プロジェクト（試料採取条件）では、試薬および装置の条件を統一（PT測定用試薬『デイドイノビン』、APTT測定用試薬『アクチンFSL』、フィブリノゲン定量用試薬『データファイフィブリノゲン』、全自動血液凝固測定装置 CS-2000i）して検討が進められています。

なお、第2ステップとして『実験動物における血液凝固系試薬の評価（仮称）』プロジェクトも企画中のようなのです。

## 凝固検査測定原理について

シスメックス株式会社学術本部  
岸本哲也

当社からの発表として、血液凝固検査の原理・検出法について解説を行うとともに、用手法から全自動測定に至る凝固検査の歴史を振り返り、1984年に発売された当社の最初の血液凝固分析装置 CA-100 から、最新の CS-2000i までに至る当社装置の歩みを紹介いたしました。



## スライドコンファレンス

参加者は各班に分かれ、症例として提出された末梢血液像、骨髄像のスライドならびに検査データから、投薬の影響をどのように解釈し、判断するかをそれぞれ班ごとに発表・ディスカッションしました。適宜、松本先生や講師の先生方からのアドバイスを受け、活発な討論がされていました。

## ■ おわりに

終了後のアンケートでも本コンファレンスは参加者の方々から高い評価を得ています。日頃、疑問に思っている内容をディスカッションできる、あるいは他施設の状況を参考にできるなど、実務に役立つ貴重な情報を得られる場、自己研鑽の場として捉えられているようです。